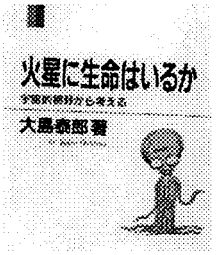

火星に生命はいるか
—宇宙的視野から考える—

大島泰郎　著

岩波科学ライブラリー60，1,000円，岩波書店

読み物

お薦め度
☆☆☆☆★

科学知識の普及速度が速まってからは，火星の生物ときいて高等な知能をもった生物を連想する人はもはやほとんどいなくなった．しかし，中高年の方々には原記憶（？）として，なぜか熊手のような原始的武器をもった「タコの八ちゃん」みたいな火星人を思い浮かべる人がまだいるかもしれない．定常的なストレス社会のなかで，世の中の人々は何かワクワクすることに飢えている．とくに化石遺伝子を操作して生きた恐竜を再現するなどといった現実離れした夢が欲しいと思うのは科学者たちの特権ではないだろう．1996年夏の場合，神戸の震災，オウムの事件，住専問題など，次から次へと出てくる暗いニュースの鬱積を一瞬忘れさせてくれたのが「火星の生命発見」というニュースであった．内外のメディアがとびついて雑誌や新聞のトップ記事を飾り，アメリカの大統領も特別の会見をした．

本文より

マスコミは専門家ではないから仕方がないとしても，その一方で，科学者，とくに生物学者や地球科学者のなかには，「あれ，何か変だな」と思った人達が多かったのではなかろうか．実際に発表直後から多くの反対の議論やさまざまな波紋がおきた．なかには「研究費に困窮したNASAのでっちあげだ」とか「いや大統領に再選されたかったクリントンの政治的アドバルーンだ」などというのもあった．発表から2年近くが経過し，最近の学会での発表をきいていると否定的意見の研究者が多いようである．しかし賛否両論のいずれにせよ，2年前の発表を契機に一気に地球外生命や初期生命に関する研究熱が高まったことだけは，このニュースの大きな貢献であったといえよう．また，しばしば通常のルーティーンワークに縛られがちな諸分野の研究者たちも，このニュースによって一時とはいえ，夢を抱いて科学を始めた頃の心の高ぶりを思い出して，「よおし」と気合を入れ直したかもしれない．

本書は，多分野の人達に影響を与えた火星生命というトピックスを平易に解説し，それに関する様々な疑問に明快に答えてくれる．詳しくは直接本書を読んで頂きたいが，確実な証拠は何か，確実に導かれる結論は何か，そしてこの研究は今後何を目指すのかがよく整理されて書かれている．また全体に明快な文章で簡潔にまとめられており，模擬「科学裁判」シーンなどを用いて専門外の方々でも十分理解できるよう工夫された好著といえよう．ちなみに本書の著者は，生命の起源についての研究で長年，日本をリードしてきた研究者である．地球外生命とくに火星生命という，まさに夢のあるテーマをずっと追いかけてきた自らの臨場感あふれる経験談が随所に挟まれおり，当事者にしかわからない感動が伝わってくるような気がするのは評者だけだろうか．

磯崎行雄（東京大学大学院・総合文化研究科）